

幼少年期の自伝（一）

—和辻哲郎『自叙伝の試み』—

柴 口 順 一

（帯広畜産大学文学研究室）
一九九九年十月三十一日受理

Memoirs of childhood (1) :

Tetsuro Watsuji "Jijoden no kokoromi"

Jun'ichi SHIBAGUCHI

はじめに

かつて大岡昇平の『幼年』（『別冊潮』、71・1『季刊日本の将来』、71・5、72・11）と『少年——ある自伝の試み』（『文芸展望』、73・4、75・7）という自伝を扱った際に、それとの比較という意味で井上靖の『幼き日のこと』（『毎日新聞』、72・9・11、73・1・31）という自伝を取りあげたことがある。ほぼ同じ時期に書かれ、しかも大岡と井上の年齢差はわずか二歳。つまり二人はほぼ同じ年齢のときに、同じ時代をほぼ同じ年齢で過したそれぞれの過去について書いていたのである。さらには、いずれもその対象が幼少年期に限られていた。比較という点でこれはそれなりの意味を持つといえるであ

う。井上のものと比べようとしたのは、だがそれだけではない。自伝が書きはじめられる十年ほど前に、大岡と井上のあいだにはいわゆる『蒼き狼』論争がたたかわされていたからでもある。歴史小説と歴史記述に関する論争の十年後、二人はいわば自己の歴史といふべき自伝を、しかも同じ幼少年期を対象とした自伝を書いていたのである。論争における両者の主張、その考え方のちがいを捉えかえしてみるといふ点でも、二つの自伝の比較は意味のないことではなかった。

しかし、『幼年』と『少年』を『幼き日のこと』と比べるのは根本的なところでどこか不当なのではないか、不当とまではいわなくとも適当とはいえないのではないかという思いをそのときから抱いていた。一言でいえば、井上のものがはたして『幼年』と『少年』に見合うような実質を持っているのかということであり、その点についてはどうも否定的ならざるを得なかったからである。『蒼き狼』論争においても井上はとうてい大岡の論争相手ではなかったようにである。

同様なことは、もう一方の比較として取りあげた「シリーズ大正っ子」と銘打たれた一連の自伝にもいえることであった。全部で十冊でたこのシリーズに言及したのは、名称のとおり大正時代にその幼少年期を過した人々のまさに幼少年期の自伝という点で、やはり大岡のものと共通するからである。それだけではない。このシリーズはどうも大岡の影響を受けていたのではないか、影響とはいわれないまでも大岡のものがそのヒントになっていたのではないかと思われる節があったからである。さらには、『幼年』と『少年』に登場していた藤田佳代、岸井良衛という二人の人物がその著者になっていたことである。大岡のものがヒントになっていたのではないかと考えられるひとつの理由でもあるのだが、それら二人の自伝のいずれにも大岡の自伝についての言及があった。

「シリーズ大正っ子」のそれぞれの自伝を読むと、大岡には見えていなかったものや忘れていたと思われるものをそこに見ることができ、また大岡のものを相対化するような視点もそこにはある。しかし、全体としてはやはり井上のものと同様、『幼年』と『少年』に見合うような実質を持ったものであったかといえれば否定的ならざるを得ないのである。

以上のような試行錯誤の比較を試みざるを得なかったのは、そのような研究がほとんどなかったからに外ならない。『幼

年』や『少年』と他の同様な自伝との比較ということだけではなく、たとえば幼少年期を対象とした自伝の比較研究といったことがである。要するに、大岡の自伝をどのように評価し位置づければよいのかというときに、参照すべき研究がほとんどなかったのである。そしてそのことは、基本的には自伝研究全体にいえることであつた。近年いくぶんの進展はみられるものの、自伝研究はなお圧倒的な蓄積不足であることはおおうべくもない。『幼年』や『少年』と比較し得る適当な自伝がおのずから思い浮かべられるといった状況にはないのである。井上の『幼き日のこと』と『シリーズ大正っ子』のそれぞれの自伝との比較は、いまだ手探り状態におけるものであつたことはいうまでもない。われわれは、しかしなおその手探り状態をしばらくは続けなければならぬであらう。もちろん、新たな展開を目指してである。

これから取りあげるのは、さしあたっては幼少年期を対象にした自伝に限ることにする。幼少年期までの、幼少年期に限つた自伝は決して少なくなく、むしろひとつの型になつていともいえるからである。また、幼少年期までとそれ以後のいわば大人の時期の回想にはやはりちがひがあると考えられるからでもある。大岡もその回想を幼少年期に限つたのは明らかにそのことを意識してのことであり、さらにいえば大岡は、幼年期と少年期におけるその微妙なちがひ、すなわち『幼年』と『少年』におけるその書き方のちがひといったことについても自覚していたのである。

幼少年期の自伝という点で、大岡のものは決して特異だつたわけではない。ただ、『幼き日のこと』や『シリーズ大正っ子』のそれぞれの自伝と決定的に異なつていたのは、その圧倒的な記述量のちがひであつた。幼少年期を対象にしてこれだけの量を持つ自伝は稀有といつてよいのである。それだけでなみの自伝をはるかに越える量でそれはあつた。『幼き日のこと』や『シリーズ大正っ子』がはたして大岡のものに見合う実質を持つてゐるかと思つたひとつの要因もそこにある。もちろん、記述量が多ければその質もおのずから保証されるというわけではない。しかし、それ相当な長さの自伝を書くためには、しかも幼少年期という限られた時期を対象としてそれ相当な長さの自伝を書くためには、一定の構想力が必要なことはいうに及ばず、何よりも充分なだけの書くべきことがら（材料）がなくてはならない。その中心となる

のはむろん自己の記憶であろうが、それだけではおそらく持続するのは困難であろう。それを検証するような、あるいは補完してくれるような他の何らかの証言や資料といったものもときには必要であろう。あるいは、過去の記憶を現在の自己がいかにつまえるかといったことも大きな問題になってくるはずである。要するに、過去について書くこと、過去の自己について書くことに対する問題意識とその持続力がなければならぬのである。

『幼き日のこと』と『シリーズ大正っ子』のそれぞれの自伝には、やはりそのようなものが欠けていたといわざるを得ないのである。いや、むしろ大岡のものがあまりにも強烈にありすぎたというべきかもしれない。『幼年』と『少年』は、記憶していることがらの単なる羅列といった退屈なものにとどまっていなかったのはいうまでもなく、自己の歴史としての自伝の、まさに歴史記述の方法という側面からも検討にたえるものになり得ていたのである。そのような大岡の自伝に匹敵するような自伝がはたして存在するのであるか。そのことを明らかにするためにも、とりあえずは大岡のものに見合うような量を持つ、しかも幼少年期を対象とした自伝を考えてみるべきではないか。そのような自伝は稀有であると述べたが、皆無ではない。むろん、手探り状態である外はないが、大岡との比較という点を中心にしていくつかの自伝を検討していきたい。

2) 最初に取りあげるのは、大岡からはややさかのぼることになるが、和辻哲郎『自叙伝の試み』(『中央公論』、57・1、60)である。

和辻哲郎の『自叙伝の試み』は、もともとは幼少年期の自伝を意図して書かれたものではない。単行本の最後に付されている「あとがき」に代へて」において夫人の和辻照は、「『自叙伝の試み』は、筆者病気のため中断いたしました。その後一年を、殆んど病臥のまま、世を去りましたので、遂に永久の中断となつてしまひました。」と述べている。はたしてどこま

で書くつもりだったのか、また書くことができたのかはむろん想像の外はないが、仮に全生涯にわたるものであったとするならば、わが国では最も長い自伝の部類に入ると思われる河上肇の『自叙伝』に匹敵する、あるいはそれを越えるものになつていたかもしれない。そのような夢想を試してみたくなるのも、幼少年期までで中断を余儀なくされたこの自伝が、すでに原稿用紙にして一〇〇〇枚に達しようとしていたからである。ちなみにいえば、河上肇の『自叙伝』は僅に三〇〇〇枚を越えていたが、その幼少年期を扱った部分はわずか一五〇枚あまり、全体の二十分の二ほどであった。『自叙伝の試み』が現在の二十倍とはいわず十倍の長さになっていたとも考えずらいが、しかし、相当な長さになっていた可能性は充分にある。和辻が亡くなったのは連載中断の年の一九六〇年。七十一歳であった。なおしばらく書きついでいくにはあまりにも高齢というほどの年ではなかった。

ところで、河上の自伝で幼少年期を扱った部分はわずか一五〇枚と述べたが、むろんそれは和辻のものとは比べてということであり、また全体の二十分の一というのも一概に少ないとはいえないであろう。要するに、和辻のものがいかに多かったかということであり、それは仮に全生涯の自伝を想定したときにもおそらくはかなりの量を占めるであろうと考えられるものだったのである。和辻自身、やはり幼少年期には特別な思いがあったのである。それは、自伝のはじめの部分にやや屈折したものいいながらはつきりと表われていた。『自叙伝の試み』は次のような書き出しではじまっている。

五十年前に、中学を出たばかりの満十七歳で、田舎から東京へ出て来た時には、広い東京に知つてゐる人が三人しかいなかった。一人は二年ほど前から上京してゐた従兄、一人は前年から上京してゐた級友、もう一人はこの時に同行して来た級友で、この級友も従兄も農村の生れであつた。その後数ヶ月して、九月に一高の寮に入り、全国から集まつて来たいろくな人と知り合ひになつたが、その中には田舎出の人が多かつた。やがて東京に慣れ、知友もふえて行つたが、その東京自体がやはり全国からの集まりで、田舎出の人が案外に多いやうに思はれた。さういふ経験からして、何といふこと

なしに、知り合つてゐる人たちのうちには農村で生れて育つた人が多いといふ風に考へてゐた。「わたくしの生れた村」

これは、田舎者としてのコンプレックスといったこととはむろん関係ない。単に自分のまわりには何となく田舎出が多いと思つていたということにすぎないであろう。しかし、最近になつてそれはまちがひであることに気がついたと和辻は続ける。実は「純粹に農村で生れて育つたといふ人は、知り合ひの中には案外少いといふことが解つた。」というのである。さらには、その少ない農村出身者のなかでも現在生きている者は片手を数えるほどしかない。「さういふことに気づくと、農村で育つた幼児の記憶を愛惜する気持が、わたくしの内に旺盛として起つて来た。」と和辻は述べるのである。これは、その自伝を書くこととする、少なくとも幼少年期をふりかえつてみようとするひとつの動機、その説明であつたとみることが出来る。だからこそ冒頭に述べていたのである。和辻にとつて、幼少年期はその時期を過した農村と切つても切れない関係として捉えられていた。そのような農村に対するこだわりが、幼少年期の多量の記述を生んだともいえるであろう。

しかし、和辻がなぜ農村というものにこだわつていたのかということとは本当のところ実はよくわからないのである。農村出身者が自分のまわりには少ないこと、そのなかでも生存している者はごくわずかであるといったことは、農村に執着する理由には必ずしもならないからである。少ないのはあくまでも自分のまわりのことにすぎず、生存者がわずかであるのもまた同様である。世の中に農村出身者は多く存在するし、多く生存しているのである。加えていえば、自伝の執筆者の多くが都会生まれの都会育ちであつたというわけでもない。和辻がこだわつていたのは、むろん切り離して考えることはできないが農村というよりは、やはり自己の幼少年期であつたというべきであろう。

以上、冒頭部のものいゝをやや細かく見てきたのは、ここにこの自伝における自己というものの基本的なあり方がすでにはっきりと表われていると考えられるからである。一言でいえば、その抑制的な態度である。幼少年期を「愛惜する気持」を、いったん農村で生まれ育つた人の稀少性に言及し、そのことに気づいたことからはじめて起つてきたものとして述べる

こと。それをいつわりだというつもりはないが、そこにはどこか自己を抑制しようとする気持ちがあるといえるのではないか。述べたように、和辻のいう稀少性は本当の意味での稀少性ではなく、したがってあえてそのようなことに触れるのは、幼少年期を「愛惜する」自己を前面におし出さなため、いわば方便という印象をぬぐえないのである。

自己の抑制的態度は、この自伝全体ににえる顕著な特徴であったといつてよい。しかし、自伝において自己を抑制するとはどういうことなのであろうか。自伝とはそもそも自己を語ることであり、自己を前面におし出すことではないのか。だが、そのような態度は大岡の自伝にも共通するものであった。しかも大岡は、そのことをすぐれて意識的に行なおうとしていた。大岡はたとえば次のように述べている。

大正年間に東京郊外で育った一人の少年が何を感じ、何を思ったかを書いて行けば、その間の渋谷の変遷が現われて来るはずである。「私は」「私の」と自己を主張するのは、元来私の趣味にない。渋谷という環境に埋没させつつ、自己を語るのが目的である。（『幼年』）

そこには、自己を語ることの照れ隠しといったこともたぶんあったであろう。また、そのために生じたやや強引な意味づけと取れないこともない。しかし、大岡には自伝を書く際のはっきりした目的と確固とした方法意識があった。それは、「私は」「私の」と自己を主張」してばかりいるような自伝に対する反発によるものでもあったであろう。そして、大岡の自伝は実際、述べられていたようなものになっていたのである。もともと、『少年』に至ってそれはやや変化を見せる。が、そのことにも大岡は気づいていた。

和辻にも、たぶん大岡と同じような思いがあったのであろう。自伝全体における自己の抑制的態度のいわば安定性という点からいえば、むしろ和辻の方が上であったといつてよい。しかし、和辻には自伝を書く際の確固とした方法意識といつた

ものはなかった。また、おそらくは明確な目的といったものもなかった。たとえば、自伝を書くということが自己にとつてどのような意味があるのか、あるいはそれを公表することにどのような意味があるのかといったことを追求してみることがなかつたのである。自分のまわりには農村出身者が少なく生存者もわずかなことに気づいたことが、あたかも幼少年期を「愛惜する」理由であるかのように、あるいは自伝を書くこととする動機であるかのように述べていたのはそのためであつた。そのようなことは、自己にとつての自伝を書く意味、そしてそれを公表することの意味といったことは何の関係もないことであつた。ただ、そのようなことを自伝を書くにあつて最初に述べずにはいられなかつたことに、和辻なりの自伝に対するある種のかまえといったものを見ることができるのである。

二

和辻の生まれ育つた農村は、現在は姫路市となつている仁豊野にぶのと呼ばれる土地であつた。当時は神崎郡砥堀村とほりの「一部」であつた。むろん和辻自身の説明であるが、出身地を現在の姫路市といわないのは当然であるとしても、当時の神崎郡砥堀村ともいわずその「一部」である仁豊野と呼ぶところに、確かに和辻自身の農村、というよりは田舎に対するこだわりがあつたといふべきであろう。ただ、農村にこだわつた和辻は農家の出身ではなかつた。寺とともに村における特権階級といふべき医者の子であつた。和辻はことあるごとにこの二家の特殊性について触れていた。家に門があることからはじまり、子供を中学校以上に入れた家はこの二つしかなかつたこと。また、江戸時代以来の村落組織には入らず、みずから農作業をすることがなかつたのも寺と医者だけであつたという。もちろん、この二家は村にはなくてはならない存在であり、人々の尊敬を集めていたことはいふまでもない。和辻はそのようなごく限られた家の三男として生まれた。農村をなつかしむためには農民の子でなければならぬといつたことなどもとよらない。むしろちがう場合の方が多いためかもしれない。田舎にあこがれるのが都会人であるようにである。和辻の農村に対する思いも、あるいはそれと似たところがあつたといえる

かもしれない。

自分の生まれ育った仁豊野について、和辻は以下さまざまな角度から説明を行なう。まずは地形について。農村においては欠かすことのできない耕地について。あるいは染色、機織を中心とした手工業や商店について。むしろ農作業についてはいうまでもない。そして祭りについて。「わたくしの生れた村」という一章を費やして和辻はそれらの点について細かに説明している。大岡の自伝にも土地に関する記述は少なくなかった。特に執拗に行なわれていたその地理記述は、大岡の自伝のひとつの大きな特徴であったといつてよい。だが、土地の説明全体としてはそれをも越えるものであったといえる。地形の記述をとってみても、大岡の執拗さに充分匹敵するものでそれはあった。ただ大岡の場合、幼少年期に何度も引越しを行ない、その先々の土地についてそのつど詳細な記述を行なっていた。もつとも、引越しは現在の渋谷を中心としたごく狭い範囲に限られていた。大岡が行なっていたのは、それぞれの自宅を中心とした周囲の詳細な地理記述であった。しばしば自作の地図を折り込みながら大岡は熱心に行なっていた。和辻の自伝にはそのような記述はなかった。和辻のは、仁豊野あるいは砥堀村全体のまさに地形学的な記述であり、大岡のような自宅周辺の地理記述といったものではなかった。それもまた農村のゆえであったという側面はあるであろう。大岡が育った渋谷はむろん現在の渋谷からは想像もつかないような土地ではあったが、和辻が育ったような農村ではなかった。

しかし、和辻はあることについては大岡と同じく極めて詳細な記述を行なっていた。それは自宅そのものについての記述である。大岡は、これまたしばしば家の平面図を挿入しながら自宅についての詳細な記述を行なっていた。その図はときとして家具の配置や庭の植木、花壇等までが描かれたものであった。和辻の自伝には平面図などなかったが、その間取りについては極めて詳細に描かれていた。診察室や薬局などを備えた比較的大きな家で、また何度か建て増しをしてきた家であったこともあり、「付近の農家と同じ構造でないばかりでなく、またわたくしの知つてゐた限りのどの親戚の家の構造とも同じではなかった。」と和辻は述べている。たぶんそのことも長く記憶に残っていた、あるいは詳細に描くことができた理

由であったといえるであろう。しかし、和辻はある事情のために一時親戚の家に寄寓していたのを除けば、中学を卒業するまでその家で過したのであって、詳細な記憶として残っていたのはもとより当然であったといえる。

大岡が家の平面図を描いていたのは、小学校へ入学する前の年に越した家からであり、家具の配置や庭の植木、花壇等までが描かれるのは中学入学の翌年に越した家においてであった。大岡の記憶は、全てではないにしてもそれぞれの家と密接につながっていた。その意味で、転居は大岡の記憶をある程度まで分節化するものでもあった。中学卒業まで基本的に同じ家に住んでいた和辻には、自己の記憶をそのような形で分節化することはなかった。だが、和辻は家に関わるそれとはまたちがった形の分節化を行っていた。それは、家のなかのそれぞれの部屋と記憶をつなげるやり方である。それは医者の家としてやや特徴のある大きな家であったからできた方法であったといえるであろう。

和辻の家では居間と寝間を兼用にしていた。その六畳の部屋に関わって和辻は次のように述べていた。

兄はわたくしよりも六歳の年長であつたが、満十歳になると間もなく親戚へ預けられたので、わたくしが兄と共にこの部屋で両親のそばに寝たのは、わたくしの三四歳頃までであつたことになる。その頃の記憶として唯一つ残つてゐるのは、或る朝、寢床の上で、何かが気に入らなくて、兄に武者ぶりついで行つたことである。兄はたゞ受身になつてゐて、本氣に喧嘩の相手にはならなかつた。これが兄との喧嘩の唯一の記憶であると共に、また兄と一緒にこの部屋で寝起きしてゐたことを思はせる唯一の記憶でもある。「わたくしの生れた家」

兄が十歳のとき親戚に預けられたのは村に高等小学校がなかつたからで、それがすぐ近くにある親戚の家から通うためであった。和辻が一時同じ家に預けられていたのも同じ事情による。ひとつの想い出が家のある部屋に強く結びついて記憶とされているというのはそれほど珍しいことではないかもしれない。だが、和辻はそれぞれの部屋ごとにさまざまな想い出を語

っていた。それだけではない。幼児のころの記憶をそれぞれの部屋との関係でひととおり語った後、和辻は次のように述べていた。

以上はわたくしの幼児の記憶に最も関係の深い部分であるが、（即ち診察室の北側にある、床の間のついた部屋）は、もう少し後の、中学生になつてからの、記憶と結びついた部分である。この部屋に接した三畳の書斎は、出来た頃をおぼ麗ろに覚えてゐる位であるから、最も新しい部分である。中学生時代には、わたくしは大抵この二つの部屋で時を送つたやうに思ふ。（「わたくしの生れた家」）

「茶の間と背中合わせになつてゐる六畳の間」が、幼少期から小学生にかけてのころまでと中学生以後を分節化する役割をはたしているといつてよい。部屋は大岡の転居と同様、和辻の記憶をある程度分節化するようなものだったのである。

和辻は、「わたくしの生れた家」と題した章の冒頭から家についての詳細な記述を行なつていた。だが、記されていたことはそれだけではない。家についての記述に続けて和述は先祖について、祖父について、叔父について、そして父、母についてそれぞれ詳細に記していた。祖先からはじめて祖父母、親戚、父母と記されるのはむろん常套である。しかし、和辻は祖母については記さなかつた。和辻が生まれてすぐに亡くなったために何の記憶もなかつたからである。また、親戚については叔父についてだけ、しかもある一人の叔父についてだけしか記さなかつたのも、例の一時寄寓していた親戚を除いて他の親戚についてはあまり記憶がなかつたためであろう。要するに、和辻は基本的に自己の記憶の範囲において、その想い出を語ることでできる人物について記していたのであつて、いわば系図的に記していたわけではなかつたのである。祖先についてはむろん直接の記憶ではなかつたが、それは祖父から聞いた話しの記憶として語られたものであつた。和辻はそれを「伝説」と呼んでいた。

おそらくはそのことと無関係ではないと思われるのだが、この章に限らず和辻の自伝全体にいえることは、家族や親戚の人々の名前が極端に出てこないということである。はじめは特にそのことには気づかなかつた。だが、いざそれらの名前を確かめようとすると、なかなか見つからないのである。父親の名前さえただ一ヶ所、しかも祖父のことばとして記されているもののなかに出てくるだけであり、母親は「おいえはん」と呼ばれていたことが記されているだけに名前はわからずじまいなのである。「おいえはん」はむろん名前ではなく、おかみさんの意である。兄弟姉妹についても、妹一人の名前が不明である。和辻には兄と弟、そして三人の妹があつた。父母、兄弟姉妹の名前をこれほど明かさないう自伝はおそらく稀であろう。親戚の人々についても事情は同様であることはいうまでもない。だけではなく、親戚についてはその全貌も明らかではないのである。つまり、叔父、叔母、いとこらがはたしてどれくらいいるのかもはっきりとはわからないのである。要するに、ごく簡単な系図（というよりはむしろ関係図）さえ描けないような書かれ方しかしていないのである。仮にわかる範囲で描いたとしても、そこにはところどころに名前が欠けたものにならざるを得ないのである。

だが考えてみれば、名前を語らないということはある意味ではむしろ自然な行爲であつたともいえるであろう。日常的に父母や叔父、叔母の名前を呼ぶことはふつうなからである。兄や姉なども同様であろう。また弟や妹、いとこなども愛称や略称で呼ぶことの方が多いであろう。実際、自伝においては特に幼少年期のことが描かれる際には愛称や略称で呼ばれることが多い。とりわけ友達についてはそうであつた。和辻自身、子供のころは哲郎さんがなまつて「テツトハン」と呼ばれていたと述べていた。ただ、和辻自身は自伝においてほとんどそのような呼び方はしていなかつた。親戚の人々の全部を記さなかつたのも、ほとんどつき合ひのない親戚はいないのも同然という意味では自然なあり方であつたともいえるであろう。ただ一人詳しく記されていた叔父は父親と同業の医者であり、おそらくは最も親しかつた人物であつたからである。それは兄弟姉妹についても同様で、一番下の妹については名前が記されていないばかりかほとんど触れられることがなかつたのは、和辻が中学を卒業して東京へ出るまでにはごく幼なく、とりたてて想い出がなかつたためであろう。だが、記され

なかつたという点では他の兄弟姉妹も大同小異だったというべきであろう。述べたように、「わたくしの生れた家」という章において集中的に取りあげられていたのは祖父と叔父と父母だけであり、兄弟姉妹についても特にまとまった記述はなかつたのである。ややまとまった記述がなされるのは、後の章における兄と一番上の妹である。そこでは兄の急病と妹の死が記されていた。妹の夭折ということもあるいは記すところ少なかつたひとつの要因であつたとはいえるであろう。ちなみにいえば、弟も早く赤ん坊のときに世になつていた。

三

兄と妹について記される前に、この自伝にはもうひとつの長い章がひかえている。「村の子」と題された、主として幼少年期の村での生活について記される章である。その章の冒頭、和辻は記憶ということに関して少々おもしろいことを述べている。和辻は「下積みの記憶」といふべきものに注目する。それは、「通例意識の表面へ浮び上ることのない」ものであるが、実は「意識の基底をなしてゐる」ものであり、「われ／＼の意識の底には、さういふ下積みになつた記憶が案外に多いのではないかと思はれる。」というのである。その発想自体特に目新しいわけではない。いつてゐることは要するに、無意識というところと同じことであろう。ただ、和辻は無意識とはいわずそれを「下積みの記憶」と呼ぶのである。和辻は続けて、その「下積みの記憶」を「意識の底」から取り出すことは容易ではないこと、それが「まさに下積みの下積みである所以」であることを指摘する。しかし、それを取り出す方法が全くないわけではないといふのである。

例へば、下積みの上に堆積してゐるいろいろな記憶、即ち大体において何時といふ烙印の押されてゐる記憶を、丹念に取りのけていけばその下積みの一部が見えてくるといふことも、ないとは限らないであらう。（「村の子」）

奇妙な発想というべきであろう。「下積みの上に堆積してゐる」記憶、つまりは「意識の表面へ浮び上」がっている記憶を取り除くなどということは、少なくともそのようなことを意識的に行なうことなど、もとより不可能であることはいうまでもない。また、それを取り除けばあたかもその下から別の記憶が見えてくるといったこともあり得ないであろう。和辻の発想はもちろん無意識という考えからきていることはいうまでもないが、それは誤解に基づいている。いつそ無邪気といつてよいそのような考えを、だがここで批判しようというのではない。問題は、和辻はなぜそのようなことを考え出したのか、考え出さざるを得なかつたのかということにある。

和辻には、幼少年期の記憶、とりわけ幼年期の記憶というものに対する懐疑があつた。和辻は、「自分の幼児の出来事として意識に残つてゐるものは、大抵後に得た知識なのである。」と述べている。和辻は「後に得た知識」ではないいわば純粹な記憶とでもいうべきものを手に入れたいと考えたのであろう。幼少年期の実際の生活について語ろうとしたとき、おそらくはそのことが氣になり出したのである。和辻の疑い自体は正当なことであつた。ただ、「後に得た知識」にはよらないいわば純粹な記憶などというものがあつたかも知存在するかのようになり、あるいはそれが抽出可能であるかのように考えたところに、先のような奇妙な発想が生まれたのである。

ところで、先の発言のなかで和辻は、「下積みの上に堆積してゐる」記憶とは「即ち大体において何時といふ烙印の押されてゐる記憶」であると述べていた。これもまた奇妙といへば奇妙な考え方といえるのだが、それについてもとやかくいうつもりはない。ただ、多くは「下積みの記憶」になつてゐる、つまりは「何時といふ烙印の押されてゐる」ない幼年期の記憶のなかにも、「稀れに年代の烙印のついた記憶が残つてゐる。」と和辻は述べていた。「幼い頃の最初の読み物の記憶などがそれである。」というのである。「読み物の記憶」がなぜ「年代の烙印のついた記憶」なのか少々わかりづらいが、要するに書物は発行年や流通していた年代等が調べられるということらしい。であるなら、それも結局は「後に得た知識」による記憶ということになるであらう。

それはともかく、和辻が最初に読んだものは文部省が作った「読書入門」という教科書であった。これは自身が学校で使ったものではなく兄の使い古しである。和辻は「近頃出た唐澤氏の『教科書の歴史』」からそのように推測するのである。教科書以外の本で最初に読んだものとしては、村井弦齋の『近江聖人』をあげている。これは博文館の『少年文学』の一篇として出たものであるが、むろんその頃は知るよしもなかった。もし知っていれば、この叢書のなかに入っていた巖谷小波の『こがね丸』、尾崎紅葉の『二人棕助』、幸田露半の『二宮尊徳』なども読んでいたであろうと和辻は述べている。和辻の読書についての記述は、いわば読まない本についての記述でもあったといえる。そうであったのも、書物については調べて書いていたからに外ならない。以下、和辻は読んだ本、読まない本を取りまけて幼年期の読書について記している。そして、読書については以後も折あるごとに記されることになる。

大岡も、読書については頻繁にかつこと細かに記していた。大岡は、「一体、私はいわゆる「自叙伝」が、少年の感情生活ばかり書いて、知識を獲得して行く過程を書かないのは間違いだと思っている。」（『少年』）と述べていた。大岡がいつているのは主として「学校の課程で習得した知識」のことであった。だが、読書もむろん知識を獲得するひとつの手段といえる。和辻のように、自伝において読書について記されることは決して珍しいことではない。その意味で大岡がいうほど自伝が「感情生活ばかり書いて」いたわけでは必ずしもない。だが、「学校の課程」については確かにあまり詳しく書かれることはなかった。和辻の場合もその例外ではなかった。

幼少年期の生活ということで中心になるのはやはり遊びであろう。和辻はさまざまな遊びについてこと細かに記している。根ッ木、こま、刀、竹馬等、全て手作りの道具による遊びであることはいうまでもない。根ッ木とは棒切れを田圃につきさして相手の棒を倒す遊びである。こまはどんぐりの真中に細く削った竹をさしたもので、刀はもちろん木製で山から採ってきた木で作ったものであった。竹馬についてはいうまでもない。田舎ならではの遊びといえようが、和辻はその作り方の手順から遊び方はもとより、うまくできるためのコツといったことまで細かに説明していた。大岡も遊びについては和辻以上

に熱心に記していた。そして、それは幼少年期の自伝にあまねく見られる記述であり、かつ最も生き生きと描かれる記述でもあった。知る限りでは、その最も生き生きした記述はたとえば古島敏雄の『子供たちの大正時代 田舎町の生活誌』（平凡社、'82・5）という自伝に見ることができる。古島は大岡よりは三つ年下の明治四十五年生まれ。大岡とは同世代であった。

「村の子」の章には、子供にとってはやはり大きな事件といふべきある旅行について記されていた。明治二、三十年代のしかも農村においては、それは子供にとつてだけの事件ではなかったかもしれない。日常的な日々の生活について描かれていたこの章のなかでは、それが唯一の事件であった。ただ、旅行とはいってもそれは神戸の親戚の家へ泊りがけで行つたという程度のことであつた。姫路から神戸まではごく近い距離であり、たぶん当時の感覚としてもさほど遠いところではなかつたはずである。そして、その旅行は数少ない「年代の烙印のついた記憶」のひとつでもあつた。

和辻が旅行の時日を特定できた、あるいはできると考えたのは、「この旅行の最後に、母と共に人力車に乗つて、村の近くまで帰つて来た時の光景」がはっきりと記憶に残つていたからであつた。

わたくしの村に姫路から生野へ通ずる播但鉄道が開通し、停車場が出来たのは、明治二十九年のことであつて、その後には神戸から村へ帰るのに人力車を使つた筈がない。人力車の記憶はこの旅行が二十九年よりも前であつたことを示してゐる。（「村の子」）

もちろん、これだけでは二十九年以前ということしか判明しない。そこからさらにしほり込むことができたのは、もうひとつのこれまた人力車にまつわる記憶によつてであつた。それは、「車の上から学校友達の一人が道を歩いてゐるのを認めて、母に学校の様子を聞き糾して貰ふために車を停めた」ことである。そのことから和辻は、その旅行を「明治二十八年の

五月頃のことであつた」と推定する。和辻が小学校へ通いはじめたのが明治二十八年四月だったからである。友達に「学校の様子を聞き糺し」たのは、「小学校へ通ひ始めてから間もない頃に、幾日かまとめて欠席したといふことを、ひどく気にかけてゐた」からであつたと和辻は周到に説明している。

だがわかるように、ここまでの説明では実は明治二十八年五月と特定することはできない。村に鉄道が開通したのが二十九年の何月のことであつたかということもあるが、「小学校へ通ひ始めてから間もない頃」というのがはたしてどれくらいかの信憑性があるのがという問題があるからである。仮にそれを信用するとしても、「間もない頃」を五月と断定することには問題がある。だからこそ和辻も「五月頃」といつていたともいえるのだが、しかし和辻にはもうひとつの根拠があつた。それは、そのときに神戸で見た歌舞伎についての記憶である。

和辻にとつて歌舞伎の印象は強烈なものであつた。神戸への旅行について語りはじめたのも、実はその歌舞伎見物について書くこととしたのがきっかけであつたといえる。現に歌舞伎については多くのことをばを費やしていた。蛇足ながら、歌舞伎ということと連想されるのは谷崎潤一郎の『幼少時代』（『文芸春秋』、55・4、56・3）である。これも幼少年期を対象とした自伝であるが、そこでは歌舞伎に関するやや常軌を逸したといふべき極めて長い記述があつた。和辻のはそこまではいかなかったが、それでも旅行に関する記述のほぼ半分を占めるものであつた。

和辻が見たのは『恋女房染分手綱』。だが、覚えてるのは重の井子別れの場面だけであつたという。和辻はそのときの役者が誰であつたのかを明らかにすべく、田村成義編『続々歌舞伎年代記』を参照する。そこから推測されるのは、重の井が五代目尾上菊五郎、息子の三吉が丑之助、後の六代目尾上菊五郎であつたらしいのである。神戸での興行の記録があつたわけではない。ただ、明治二十八年の五月に菊五郎が大阪の浪花座に来ていること、また前月四月には新富座における菊五郎一座の興行に丑之助も加わっている事実から和辻はそう判断するのである。「神戸で興行したとは書いてないにしても、大阪で興行してゐたのなら、序でに神戸へ数日の興行に来たといふことは、十分推測の出来ることである。」と和辻

は述べている。はたしてそのようなことがあり得るのかはわからない。もしかしたら神戸から大阪まで見に行ったのではないかと考えられないこともない。いずれにしても、「小学校へ通ひ始めてから間もない頃に、幾日かまとめて欠席したといふことを、ひどく気にかけてゐた」という先の説明は、明治二十八年五月という日付をいわば合理化するための、まさに「後に得た知識」によるものであつた可能性が高いといえるであろう。さらにいえば、友達に「学校の様子を糾し」ということ自体またそうであつた可能性も否定できないであろう。

和辻は、幼少年期の記憶が「大抵後に得た知識」であることを嘆いていた。だが、そうではないいわば純粹な記憶とでもいふべきものは存在しないことは先に述べたとおりである。そして、それは何も幼少年期の記憶に限つたことではない。記憶とは、たえず現在における記憶でしかあり得ないのである。その意味では、和辻の合理化を一概に咎めだてるには及ばないであろう。そのときの記憶として和辻はたぶん、そのとおりのことを述べていたはずである。和辻に欠けていたことがあつたとすれば、その記憶がいかにして形づくられてきたのか、あるいは形づくられているのかということをも反省してみることをしなかつたことである。

四

「わたくしの生れた村」、「わたくしの生れた家」、「村の子」、以上三つの長い章のあとにはうって変わつてごく短かい章が四つ並んでゐる。いずれもが親戚の家に預けられていたおよそ一年のあいだのことが描かれた章である。親戚は姫路からほど遠からぬ加古川にあつた。神戸への旅行がひとつの事件であつたと同様、加古川行もひとつの大きな事件であつたことはいふまでもない。ましてや今回は一人であつた。村から汽車を乗りついで一時間たらずの行程を和辻は「旅」と呼んでいた。親戚の家に預けられたのは村にはない高等小学校へ通うためであつたが、先に述べたように、ただ一人の叔父を除いて親戚については特に記述がなかつたなかで、この一時奇寓していた親戚についてはやや詳しく記されていた。ただ、ここでもや

はり叔父についてだけであった。

和辻は、ここでやや後までつき合いの続くことになることと出会う。自伝冒頭で述べられていたのはじめて東京に出てきたときにわずか三人しかいなかった知り合いのなかの一人である。いとこは和辻の二級上でむろん同じ学校へ通い、家では机を並べ毎日いっしょであったと述べられていたが、しかしこのいとこについても多くは語られてはいない。集中的に語られていたのは兄と一番上の妹についてであった。すでに述べたように、これまで兄弟姉妹についても特にまとまった記述はなかつた。ここにきてはじめてまともに記されることになるのである。だが、それはいずれもが苦しい想い出であつた。親戚の家に預けられていた一年あまりのあいだに兄と妹はあいついで病氣になり、妹は帰らぬ人となつてしまったのである。

和辻の自伝全体にいろいろの大きな特徴として自己の抑制的態度といふことを指摘したが、そんななかでここは珍しく自己の感情をあらわに表わしている部分といえる。兄については加古川までわざわざ使いが呼びに来て急いで帰つたが、さいわい大事には至らなかつた。だが、和辻は家につくまでのあいだの気持ちを克明に記し、かつ兄との想い出をやや感傷的に語つていた。

わたくしは心から兄を尊敬し、また頼りにしてゐた。何か解らないことがあれば兄のところへ聞きに行き、兄の教へで満足してゐた。ほかの子供たちとの遊びの際にも、兄の与へる保護が何となく感ぜられてゐたやうに思ふ。それは刀田の高等小学校へ来たときにさへも感ぜられたことであつた。だから兄を頼りにすることは、物を覚えて以来のわたくしの習性のやうになつてゐたのである。「初めて死といふものに」

和辻の自伝には家族に対する反発や不満といったことがほとんど描かれることがない。一言でいって、家族に対しては実に親和的なのである。大岡の自伝では父親に対する深刻な対立が描かれていた。とりわけ、『少年』においてはそれが

大きな位置を占めていた。和辻はせいぜい祖父の癩癩について不満をもらすくらいで、父親に対しては何の反感もなかった。それは兄弟姉妹についても同様である。兄を尊敬し、頼りにしていたことにむろん嘘はないであろう。だが、いかに尊敬しどのように頼りにしていたのかを具体的な想い出として語られることはほとんどなかった。

妹が病氣になったのは、和辻が夏休みで帰省中のことであつた。妹が死ぬ日の朝、和辻は祖父に使いを頼まれて家を出た。川原を歩いていると、何羽かの鳥がすぐ側へ来て餌をあさつていた。近寄つて行つてもなかなか飛びたとうとしなない。

それを見てあるうちに、わたくしの心の中で渦巻いてゐた妹の病氣の心配が、ふとその鳥と結びついたのである。小石を投げてあの鳥に当てることが出来たら、妹の病氣は必ず癒るであらうといふ考が、ふと胸に浮んで来た。(「同」)

和辻は小石を投げつけた。だが、当たり前にはなるが何度投げても当たらない。

当らないとなると妹の病氣は癒らないことになる。従つて当らない度数が重なる度毎に、当らなければ大変だといふ氣持が高まつてくる。わたくしは段々興奮して、夢中になつて小石を投げ続けた。それに従つて鳥は前よりも遠のいて行つた。当る可能性は段々減つて行つた。それに従つてわたくしは益々興奮し、泣きたいやうな氣持になつて来た。(「同」)

このような強迫観念にとられることはたぶんそれほど珍しいことではない。だが、和辻の場合それはまさに妹の死を予言するものとなつてしまつたのである。使い先の家の名前をすっかり失念してしまつた和辻はむなしく家に戻るが、そのときすでに妹は死に瀕していた。妹はその日のうちに息をひきとる。和辻は声をあげて泣いた。「この時以後にわたくしはこれほど純粹に号泣したことはない。」と和辻は述べている。だが、それだけではない。「この時以来、死といふものがわたく

しにとつて無縁のものではなくなつて来たのである。」とも述べていた。死といつても自分の死ではない。「下の妹が同じやうに死にはしないかといふ心配であつた。」と和辻はいう。さらには、その下のもう一人の妹、そして大病をした兄についてもそれは同様であつた。

和辻が兄弟姉妹の死を経験したのははじめてのことではなかつた。すでに弟を失つていた。弟は生まれて間もなく亡くなり、そのときには和辻も幼かつた。だが、「家の中に起こつた何とも言へない異様な雰囲気」は感じていたと述べていた。おそらくはそのこともあり、そのような不安にとらわれたのであろう。当時としては決して珍しいことではなかつたとしても、確かに和辻の兄弟姉妹は死におびやかされていたといえる。その意味で、和辻の不安は決して特異だつたとはいえないであらう。特異だつたのは、その死から自己を除外してしたことであらう。だが、それもこのときの和辻の年齢を考えれば一概にそうとはいえないかもしれない。自己の死の恐怖に悩まされるのには、やはり和辻は少々幼すぎたといわざるを得ない。和辻はこの年高等小学校一年、十歳であつた。

それよりも特異だつたといふべきなのは、和辻が兄弟姉妹について語る際には、ほとんどこのように死と関連づけてしか語ることしなかつたことであらう。兄についてはのちにも触れられることはあるが、下の妹もその下の妹もその後全くといって触れられることはないのである。一番下の妹については名前さえついに明かされずに終わってしまうことは以前述べたとおりである。

親戚の家から学校へ通うという生活も、だが一年あまりで終わりをつけることになる。二年生になつて間もなく、親戚が西宮へ引越すことになつたからである。和辻はやむを得ず姫路の高等小学校へ転校し、家から通うことになる。もともとはそこが通うべきはずの学校であつた。だが、家から遠距離にあつたため、すぐ近くに高等小学校のある親戚の家に預けられたのであつた。和辻は以後中学を卒業するまで片道一里半の道を徒歩で通うことになる。中学校は小学校のすぐ隣りにあつた。転校後の小学校生活について記されるところは少ない。

五

片道一里半、往復三里の道を和辻は毎日三時間以上かけて学校へ通った。それは中学を卒業するまでのおよそ六年間続いた。その往復の道は和辻にとって忘れられない思い出として深く記憶に刻みつけられることになる。「中学生」という章のはじめに和辻はその通学の道筋を克明に記している。

小学校を過ぎたあたりから前に言つた隘路に入るのであるが、街道は西側の山裾にある人家の間を通るので、かなりくねくねと彎曲することになる。だからこゝから先は大抵の場合街道を歩くことをやめて、鉄道線路を伝ふか、でなければ細い里道を通つて武田淳心君の寺のある村を抜け、東側の街道へ出たものであつた。この街道はわたくしの村を通つてゐる街道と平行して市川の東側の村々の間を北方から姫路へ通じてゐるのであるが、前に言つた隘路のところでは市川が東側の山の崖下を流れることになるので、止むを得ず市川の西側へ渡り、西岸の提防下を走ることになる。「中学生」

和辻は以下えんえんと片道六キロの道をたどるのである。和辻の自伝がそれ相当な長さになつていた、あくまでもそのひとつの要素にはすぎないがしかし確実な要素といえるのは、このような地理記述にあつたことはまちがいない。自伝はじめの部分から、生まれ育つた仁豊野の地形や耕地に関する詳細な記述がなされていた。寄寓していた親戚のある加古川についても実は詳しい地理記述があつた。すでに述べたように自宅の間取りについての極めて詳細な記述も同様な記述と見ることができるところである。

そのような地理記述の多さに比較して、たとえばこの自伝には同時代のいわゆる歴史的事件に関する記述は極めて少なかつた。「中学生」の章以前のこれまで見てきた部分において、ごく簡単ながらも取りあげられていたのはいわゆる北

清事変くらいなものである。北清事変が起こったのは明治三十三年六月であった。ことさらこの事件に言及していたのは、それが姫路の高等学校へ転校したのと同じ年同じ月であったこともあるが、明治三十三年が一九〇〇年という世紀の変わり目の年であったからでもある。要するにそれだけの理由であった。少々詳しく記されているのは、後の記述における日露戦争直後の日比谷焼打事件についてであった。中学卒業後東京へ出た際の記述にそれはあったが、それも日比谷公園に案内されたときの話しとして、いわば土地との関係で記されたものであった。日比谷焼打事件が起こったのは、和辻がまだ東京へ出る前の明治三十八年九月のことであった。

歴史的事件についての記述がないことを、たとえば社会的関心の欠如として非難すべきではおそろくない。幼少年期、とりわけ幼年期においては、いわゆる歴史的事件に対する関心もなければ記憶もないというのが普通だからである。記すとすれば、それはいきおい「後に得た知識」によらざるを得ないであろう。もちろん、そのことが悪いわけではない。ただ、歴史的事件を自伝に持ち込む際には、とりわけ幼少年期の自伝に持ち込む際には、得てして観念的ないし抽象的になってしまいがちなのである。歴史的事件はむしろそれぞれの個人に何らかの影響を与えずにはいないであろうが、しかし日常的な日々の生活においては直接に、またただちに影響をこうむるとは限らないし、またそれを実感するとも限らないからである。北清事変も日比谷焼打事件も、さしあたっては和辻の生活とは何の関係もなかった。少なくとも、和辻は何の関係も見出してはいなかったのである。述べたように、和辻がそのような事件に触れるのはごく稀なケースであった。その意味で、全体として和辻の自伝は決して観念的であったわけでも抽象的であったわけでもない。むしろ極めて日常的な日々の生活に密着したものであったといつてよい。通学の道筋をえんえんと記すことはそれ以外の何ものでもないであろう。

ところで、先に引用した記述のなかに「武田淳心君の寺のある村を抜け」云々という記述があったが、中学生になる前後の記述あたりからこの自伝には、急に固有名で呼ばれる人物が多く登場するようになる。「武田淳心君」とは、以前村で子供を中学以上に入れたただ二つの家と述べられていた一方の寺の息子ではなく、おそらくは隣り村の別の寺の息子である。

成長するにしたがって当然つき合う人物も多くなり、また記憶もより確かになってくるであろう。その意味で、固有名で呼ばれる人物が多く登場してくることに何の不思議はない。ただ、親戚の人々はおろか母や妹の名さえ記されなかったそれまでのあり方を考えるとき、どこか切り切れない感じがしないでもない。それと同時に、それまでには感じる事のなかった何か不思議な感覚にとらわれてしまうことがあるのである。名前が、何か異常な細部として見えてしまうという感覚である。

通学の道筋についての記述のあとには入学した中学校について記されている。そのはじめの部分にたとえば次のような記述がある。

わたくしの入学した時は、名校長の噂の高かつた小森慶助氏が、たしか文部省の視学官か何かに転出したあとで、新しい校長の永井道明氏はまだ赴任して来てゐなかつた。その赴任は一二ヶ月後だつたと思ふが、多分その機会に小森前校長も姫路へ来られたのであつたらしい。(「中学生」)

担任の教師ならまだしも、中学校のときの校長の名前をフルネームで、しかも入れちがいに出ていった校長の名前まで覚えていたというのは時代のちがひといふべきなのか、あるいは個人的な関心や記憶力のちがひといふべきなのかはわからない。驚異的な記憶といふのではもとよりのないが、少々目を引く記憶とはいえるであろう。和辻は、あるいは何かを調べて書いていたのかもしれない。いずれにしても、「小森慶助氏」や「永井道明氏」という記述が、あるいはそれを含む先のような記述が、何か異常な細部のように見えてしまうという感覚をぬぐえないのである。

さて、先には和辻の読書について触れたが、その後も読書については折あるごとに記されていた。中学生になるころからそれはいよいよ本格化する。それは、当時中学校へ進学するような人のごく一般的なあり方であつたであろう。ただ、和辻

は『文庫』『明星』『白百合』『新声』『帝国文学』といった雑誌に加え、当時創刊されたばかりの『平民新聞』も購読していたという、かなり活字好きの中学生であったとはいえるであろう。「中学生」の章にはさまざまな読書について記されている。そのなかで、和辻が最も影響を受けたのは徳富蘆花の『思出の記』であった。この作品は当時広く影響を与えた作品であった。その点でも和辻はごく一般的とはいわないまでも、決して特異だったわけではない。ちなみにいえば、大岡も同じ中学生のときに『思出の記』を読んでいた。大岡はそれを「自伝文学」と呼び、そのような読み物は「明治大正の日本に氾濫していた。」(『少年』)と述べていた。和辻は、それを読み「人生に対して初めて眼を開かれたやうな感覚を覚えたのであった。」と述べ、さらには「思想の方面で『思出の記』が与へたほどの感銘を与へたものはほかにはなかった。」と述べていた。そのひとつの理由として、和辻ははじめて主人公にキリスト教を近づけた友人に関する「描写」をあげていた。「描写」とはいつても、「文章の上からでなく内容の方から最も強い影響」を受けたと特に断わっていたように、和辻が強く動かされたのはキリスト教信者としての友人のあり方であった。

この自伝においてキリスト教について記されるのははじめてではない。やはり読書について記されている部分に、挿話的に次のような話しが記されていた。幼いころの数少ない兄にまつわる想い出なのだが、ある日兄は野球の試合をするといって家を出たが日暮れになっても帰ってこない。心配した両親は人を頼んで兄を捜索してもらうことにした。さいわい、兄は捜索に行った人といっしょに無事帰ってくるのだが、和辻はそのとき子供ながらに「兄が無事に帰って参りますやうにと、心をこめて「神様」にお祈りをした。」というのである。そして、「その「神様」が、日本の神々のどれでもなく、どうやらキリスト教の神らしく思へるのである。」と述べていた。和辻はそれがどうしてキリスト教の神であったのかと問い、そのような知識が入ってくる道は当時愛読していた雑誌『少年世界』の外にはないと結論づけていたのである。

和辻はその後キリスト教に近づいていったわけではなかったし、『思出の記』を読んだときにもその教えに深く傾倒していったわけではなかった。ただ、キリスト教をとおして「立身出世のことなどよりも信仰の問題や人生の意義の問題の方が

遙かに重大である」という意識がこのとき和辻のなかに起こってきたのである。

ちょうど同じころ、そのような意識とも深く関わっていたというべきある事件が起こる。やがて和辻も進学することになる一高の学生藤村操の自殺である。和辻はこの事件からも強いショックを受けたと述べていた。「巖頭之感」という一文にある「ホレーシヨの哲学」に謎めいたものを感じ、「ハムレット」にも強く関心をそそられたという。「不可解、煩悶といふ風な言葉が、くり返しく意識の表面に浮かんで来た。」と和辻は述べている。いうまでもなく、それは当時社会的にも大きな衝撃を与えた事件であった。とりわけ青少年に与えた影響は大きかった。その点でも和辻は例外ではなかったのである。『ハムレット』に対する関心もまた同様である。藤村操の自殺は明治三十六年五月、和辻は十四歳であった。そのことに強い衝撃を受ける年齢としては、だがかなり低い方に属していたとはいえるであろう。

話しは変わるが、明治三十六年は大阪で第五回内国勸業博覧会が開かれた年でもあった。和辻は春休みを利用して見物に出かけた。西宮にある以前寄寓していた親戚の家に泊り、例のいとこといっしょに見に行ったという。翌々年の春休みには京都へ行った。京都には父親と同じ医者であった叔父と三高へ進学していた兄がいた。さらにその年の夏休みには級友といっしょに水泳合宿にも行っている。それは中学生最後の夏休みであった。

中学校生活も終わりの方に近づくにしたがって進路のことが問題になる。京都へ行ったのも、「進学について腹をきめるためであつたやうに思ふ」と和辻は述べていたが、しかしそこで何らかの情報を集めようとしたわけではなかったし、兄に相談をしたというわけでもなかった。ただ、将来は医科ではなく文科へ進みたいという思いはそのころすでに動いていたという。そう考えるようになった理由として、『思出の記』や藤村操の自殺もあげられていたのであった。そしてもうひとつの理由として、和辻は父の医者としての仕事を見て自分にはとてもできないと思つたからだと述べていた。何とも無邪気なと思わないでもない理由のだが、しかし農村における当時の医者がいかに大変な仕事であつたかは想像するに難くない。和辻は、「父は自分自身の享樂といふ風なことは殆んど放擲して、黙々として病氣と戦つてゐた。」と述べていたが、

たぶんそれが実感だったであろう。それに比べれば、『思出の記』や藤村操の自殺といったことの方がむしろ実感とはかけはなれた観念にすぎないともいえるであろう。

そして、和辻が最終的に文科への進学を決めたかなり決定的な理由もある実感によるものであった。京都へ行ってから半年あまり後のこと、つまりは和辻の最終学年の秋のことであった。学校の「発火演習」の際に中隊長をさせられた。中隊の対抗演習なので中隊長が最高の位置にある。和辻は自身の性格を思い、とまどうが、辞退する知恵もなく引き受けてしまった。だが、案の定指揮官として失敗をしてしまうのである。「わたくしはこの時の経験で、指揮するとか支配するとかいふことがいかに自分の性に合はないかといふことを痛感した。」と和辻は述べている。そして、「この経験は将来の志望を定める上に相当に強い影響を与へたと思ふ。」と述べているのである。そのことがあった直後に、和辻は兄に文科をやりなさいと相談の手紙を出したという。文科へ進むということが「指揮するとか支配するとかいふこと」と必ずしも無縁であるとは限らないであろうが、ともあれ兄も賛成し力づけてくれたので和辻は父にその旨を伝えた。すると父はあっさり承認してくれたという。父親も医者の仕事の大変さが身にしみていたのかもしれない。「文学者などになることを親たちが非常に嫌った時代で、方々の家ではそのために親子の間がもつれたりなどしてゐたが、わたくしはさういふいやな思ひを全然せずしますことができた。」と和辻は述べている。進路のことでも、和辻は親との何の葛藤もなかったのである。

六

中学を卒業すると和辻はすぐに上京する。卒業式の翌日に仁豊野をたつというあわただしさであった。さしあたっての用があつたわけではない。ただ、一日も早く本格的な受験勉強に取り組みたかったのである。当時の高等学校の新学期は九月で、七月に入学試験があつた。和辻は当時中央大学に付設されていた予備校に通う。だが、予備校での生活について記されるところは少ない。和辻が熱心に記していたのは、はじめて見た東京についての印象であつた。二年前に上京していた例

のいとこに、一週間くらいあいだあちこち案内してもらったのである。日比谷公園へ行ったのもそのときのことであった。和辻はまさに東京見聞記といった趣で、案内された東京の街をつぶさに説明していく。その章の題も「半世紀前の東京」であった。

日比谷公園のそばには道路をへだてて帝国ホテル、華族会館、勸業銀行などが並んでいた。そこから三菱第一号館などの赤煉瓦の建て物の並んだ三菱ヶ原を通り神田方面へむかう。美土代町にキリスト教青年会館、錦町に錦輝館、さらに駿河台まで足をのばすとニコライ堂があった。お茶の水橋を渡ればすぐに女子高等師範学校、順天堂病院が見え、その先には神田明神がある。さらに上野方面へむかうと湯島天神。池の端へ出、蓮池のなかの弁天堂を見て桜の満開だった上野公園へ足を入れる。上野公園には西郷隆盛の銅像、博物館、清水観音堂があり、表慶館は建築中であつた。それから浅草へ行き、観音堂に寄り十二階に登つた。さらに吾妻橋を渡り隅田堤へ出、そこではじめて隅田川のボートレースを見る。

これらの場所を和辻は一日で見てもわつたわけではもちろんない。以上記したのは、一週間あまりの東京見物で見たところを、日比谷公園からはじまるコースとして和辻がいわば再構成したものであり、それを少々整理して書いたものにすぎない。これもまた、先に見た通学の道筋やその他の地理記述と同様なものと見ることができであろう。また再構成する際に和辻は、そのときには行かなかつたが後になって訪れた場所などもいっしょに記していた。また、後の東京生活において得た知識によるさまざまな説明も行なつていたことはいまでもない。たとえば、日比谷公園付近の建て物について記していた際には、帝国劇場や警視庁などはまだなく、その数年後にできたと述べられていた。錦輝館に触れられた際には、神田には他に東京座や三崎屋といった劇場があつたことが記されていた。あるいはお茶の水付近の記述においては、ニコライ堂へは行つたがすぐそばにあつた湯島聖堂へは行かなかつたと述べていた。神田明神については、今の東京見物のプログラムに入ることはないであろうといったことも述べていた。

ところで、東京見物のプログラムには入らないという点では今に限らず当時もまたそうであつたであろう場所をふたつ、

和辻はある特別な思いをこめて記していた。ひとつはその後よく通うことになる、そしてもうひとつは少々近づきたい場所であった。上野の図書館と丸善である。丸善の方は少なくとも一高に入学する以前に行つた覚えがないと述べていたが、上野の図書館つまり帝国図書館は上京間もないころに行き、鮮やかな印象として残っていると述べていた。帝国図書館は明治三十九年三月二十日に開館した。和辻が上京するわずか十日あまり前のことであつた。新聞雑誌に図書館の開館について何か書かれていて、それを読んで行つたのではなかつたかと和辻は述べている。そこではイギリスの十九世紀の詩人の作品を次々と借り出して読んだという。和辻の志望は英文学であつた。徳富蘆花の『思出の記』に深い感銘を受けた和辻であつたが、興味があつたのは小説よりもむしろ詩の方であつたと以前には述べていた。最初に接したのは新体詩であつたが、その後ワーズワース、コールリッジ、バイロン、シェリー、キーツなどに強い興味をひかれたという。中学校の校友会雑誌にバイロンの『シーヨンの囚人』の翻訳を載せたこともあつたと述べていた。

図書館で借り出すことができる本は、だが一度に二、三冊くらいにしかすぎない。また、そのたびに係の人の手をおさなければならぬという煩わしさがある。それよりも、見たい本がずらりと並んでいて自由に取り出すことのできる便利な場所として、丸善をあげていたのであつた。だが、やがてそのことに気づき和辻は丸善に通うことになつたというわけではない。あたり前のことだが、見ることはできても買うことはできないからである。丸善はやはり近づきたい高級な場所であり、和辻にとってはいわば遠い場所としてあげられていたにすぎない。そして、やがて和辻はイギリスの詩人たちからしだいに離れていくことになる。和辻は一高入学の際に、哲学志望として届け出たのであつた。そのことが、それらの詩人たちから、あるいは英文学から離れていくひとつのきっかけであつたとするならば、そのもともとのきっかけはすでに上京後間もないころにあつた。

和辻は、四月八日の午後であつた、と珍しく日付をはつきりと述べている。その日、和辻は姫路中学で兄の一級上であつたという人物の下宿を訪れる。当時一高の三年に在学していた。兄が紹介状を書いてくれたのである。その人物から和辻は

一高についてのいろいろな話しを聞いた。そのなかで、入学の際には英文学ではなく哲学志望にした方がよいということを聞かされたのである。英文学をやめろといわれたのではない。哲学志望にしておけば三年後大学に進む際に英文学科へ何の拘束もなく転科できるが、その反対はできないというのがその理由であった。入学時にすでに組分けをし、授業科目が異なる関係からであった。和辻はその助言にしたがったのである。もちろん、和辻のなかでは志望をかえたわけではなかったから、その後も特に哲学の勉強に励んだわけではなかった。好きなのはやはり英文学であったという。しかし、そのときに哲学志望にかえたのは、「単に外から動かされただけではなく、わたくし自身のうちにそれに共鳴するものがあつたからであらう。」とも述べていた。いうまでもなく、後に和辻は哲学科へ進んだ。

「半世紀前の東京」という予備校時代を扱った章の次には「入学試験のこと」というごく短かい章がある。だが、実際の試験について記されるのはその一部にすぎない。和辻は他に入学試験の制度について、そしてやや唐突にも予備校時代に覚え病みつきになったという基について記していた。中学校の入学試験についても記されるところは少なかった。はっきりと覚えているのは結果発表のときのことだけで、試験についてはほとんど何も覚えていないと述べていた。和辻は一人で校庭にはり出される結果を見に行ったという。何かの都合で夜七時すぎの発表となり、先生たちが照らす提灯のあかりの下で見たこと、そして家に帰る終列車に間に合うかどうか非常に心配だったことが、あるいははっきりと記憶に残った理由であったといえるかもしれない。だが、試験のことは忘れても発表のときは覚えているというのは当然といえば当然のことともいえるであらう。

今度の試験についても記されるところは多くない。試験会場や試験終了後の意気沮喪した気持ちなどについては記されていたが、試験の内容とといったことについては一切記されてはいなかった。それもまた当然といえば当然といえるのだが、しかし受験番号の一二七は覚えていた。これもまた異常な細部といえないこともないのだが、たとえば試験問題を逐一覚えていたといったことに比べれば、矛盾したようないい方になるが大きな細部とでもいうべきものであらう。異常な細部などと

いったことはもとよりないというべきなのかもしれない。記憶には本来細部やそうでない部分といった区別はないという外はないからである。記憶には、いわば記憶していることと記憶していないことの区別しかない。というよりは、記憶していることしか知らないのである。

結果発表のときはむろん今回もよく覚えていた。だが、中学のときに学校へ発表を見に行ったのではなかった。和辻は試験が終わるとすぐに田舎に戻っていた。和辻は、村役場へ行きそこにおいてある官報でそれを知るのである。官報は当然のこと数日遅れて村に届く。和辻が知ったのは、したがって発表の数日後であった。誰かに知らせてもらおうというようなことも思いつかなかったという。今日から見れば何とものどかな光景という外はないが、合格電報といった学生アルバイトもなかったであろう当時のことを思えばそれもいたしかたがないであろう。ただ少々気になるのは、和辻は合格通知については何も触れていなかったことである。和辻の数年前に一高に入学した阿倍能成も、その自伝『我が生ひたち』〔心〕、60・61・65・12）において、合格を知ったのは官報によつてであり、どういう通知があったのかは覚えていないと述べていた。もちろん、当時合格通知がなかったわけではない。阿倍は、他人の合格通知のはがきが自分の家に迷い込んだことがあった、と人の合格通知のことは覚えていた。おそらく、それよりも官報の方が早かったであろう。そのために、合格通知の印象が薄れたのである。阿倍が人の合格通知を覚えていたのは、それが誤配された他人のものだったからであつたというべきであろう。

ところで、阿倍の自伝もその幼少年期の記述にはかなりの量を費やしていた。昭和二十年の敗戦、阿倍が六十歳を越えたあたりまでが描かれるこの自伝は、中学卒業までですでに全体の半分、原稿用紙にして六〇〇枚に達しようとしていた。和辻の自伝が中断した年に、あたかもそれを追いかけるように書きはじめられた阿倍の自伝には、和辻についての言及はもちらん、『自叙伝の試み』についての言及もあつた。一高の入学試験については、和辻は一番で入学したらしいと述べていた。阿倍は三番であつた。ちなみにいえば、藤村操は阿倍の同級生、その妹は後に阿倍夫人となる。

ともあれ、和辻は村役場で官報を見て自分の合格を知った。和辻はそこで珍しく次のようなまさにのどかな光景を描写することで「入学試験のこと」という章をしめくくっていた。「官報を見せて貰つてゐた役場の室に、涼しい風が吹き通してゐた。」

こうして和辻ははれて一高生となった。和辻はすでに十七歳であつた。この自伝の最後には、「一高生活の思ひ出」という章がある。述べたように、『自叙伝の試み』は和辻の死によつて中断した。「一高生活の思ひ出」という章をもつて中断したのか、あるいはこの章自体が中断しているのかはにわかには判断ができない。だが、いずれにしてもそこで描かれる和辻はもはや少年とはいひがたいであらう。

大岡の自伝は成城高校進学の時点で終えられていた。大岡もやはり十七歳であつた。「銀座に出ようか」がわれわれ成城ポトイの夕方の合言葉」となつたと大岡は述べ、「これらはもはや「少年」の世界ではない。」（『少年』）と述べていた。和辻は銀座、あるいは当時ならば浅草といつたところをぶらつく習慣はなかつたが、たとえば寮に入つてはじめてコンパヤストームを経験することになる。もつとも、当時のコンパはお菓子を持ちよつて寮の部屋で開かれ、ストームとは夜遅く大声を出して寝入りばなの部屋を襲うという無邪気なものであつた。だが、これらも「もはや「少年」の世界ではない」であらう。

和辻の自伝も、一高進学時まででひとまず終わりとしたい。だが、本論を終るにはすでに遅きに失したという感がしないでもない。中学校入学、あるいは中学なかばあたりからすでに少年とはいへないのではないかといつたことではない。むしろそれもないことはないが、少年の区分にはさまざまな議論が予想される以上、とりあえずはこだわらない。遅きに失したというのは、本論は和辻の自伝に少々つき合ひすぎたということである。もともと、自伝にそいながらその生涯（といつても中学までであるが）を追いかけていくつもりはなかつた。だが、いつしかそうなつてしまった。そのことにやや専念しすぎてしまったきらいがあるのである。和辻の自伝はなぜそのようなことを強いたのか。あるいはそれは和辻の自伝に限つ

たものなのかどうか。そのことを考えるためにも、もう少し他のものを見てみる必要がある。

注

- (1) 拙稿「大岡昇平における歴史(四)」(『帯広畜産大学学術研究報告人文社会科学論集』第9巻第2号、95・3)。
 同「大岡昇平における歴史(五)」(『帯広畜産大学学術研究報告人文社会科学論集』第9巻第3号、96・3)。
- (2) 『蒼き狼』論争については、拙稿「大岡昇平における歴史(一)」(『北海道大学文学部紀要』第41巻第2号、92・10)を参照。
- (3) 「シリーズ大正っ子」のそれぞれの自伝は以下のとおり。出版は青蛙房。
 鹿島孝二『大正の下谷っ子』(76・9)。
 村上信彦『大正・根岸の空』(77・2)。
 岸井良衛『大正の築地っ子』(77・5)。
 玉川一郎『大正・本郷の子』(77・6)。
 多賀義勝『大正の銀座赤坂』(77・12)。
 藤田佳代『大正・渋谷道玄坂』(78・1)。
 波木井皓三『大正・吉原私記』(78・3)。
 森岩雄『大正・雑司ヶ谷』(78・4)。
 岩野喜久代『大正・三輪浄閑寺』(78・6)。
 北園孝吉『大正・日本橋本町』(78・9)。
- (4) 和辻哲郎『自叙伝の試み』(中央公論社、61・12)。なお、以下引用は単行本所載本文による。ただし、旧字は新字に

改めた。

(5) 『自叙伝』は河上の死後次の諸誌に発表された。

『世界評論』(46・2、47・10)。

『改造』(46・2、46・5)。

『民衆の旗』(46・2、46・7)。

なお、単行本は世界評論社より、第一巻(47・5)、第二巻(47・9)、第三巻(47・10)、第四巻(48・3)の四冊が発行される。